“ありのままで” ～福島の今を考える～

7月中旬、福島在住The K.I.S.S.Project事務局の林さんとそのメンバーが、私（パースふくしまの会副会長）の日本帰省に合わせ、「女性のための相談支援センター」、「地域活動支援センター／障碍者地域生活センターNPO法人　結」、｢福島大学附属特別支援学校｣、そして「ラジオ福島」を訪問できるよう調整して下さった。久しぶりの日本では、ディズニーアニメーション映画 “アナと雪の女王”（原題 “Frozen”）の劇中歌 “Let it go” が“ありのままで”という邦題で大流行していた。何でも氷に変えてしまう不思議な力をひた隠しに生きてきた主役が、「自分を隠し続けるのはもう沢山、ありのままの姿で生きていきたい、生きていこう」と、心に決める歌である。“ありのままで”という題名が、震災から3年半程経過した福島に重なった。

7月18日、まず初めに話を伺ったのは「女性のための相談支援センター」の安部所長だ。女性のための相談支援センターは、「富岡養護学校」、「福島大学附属特別支援学校」、と同じく、以前、パースの保護者に記入頂いた親親メッセージの届け先だ（親親メッセージプロジェクトの詳細は“パースふくしまの会”HP活動報告を参照）。当センターの安部所長はそのお姿からも、口調からも優しさがにじみあふれる方だったが、ひとたび話を伺い始めると、震災当初から周りの状況や環境を冷静に見極め分析されていることが伝わってきた。特に、「必要とされる支援は変化しており、一元的な支援ではなく、個々に合った支援が必要だ」という言葉が印象的であった。しかし、個々に合った支援とは具体的にどんな支援なのだろうか。個々とはどんな人々なのだろうか。それを知るための手段が“ありのままの”福島を知ること、伝えることではないだろうか。

震災から3年以上経過した今でも、福島がテレビ、新聞、雑誌などで取り上げられることは多い。しかし、それらの多くがショッキングな見出しをつけ、ドラマティックな内容に終始している。例えば、グーグルで“福島原発”と検索してみると2番目の記事に“衝撃！福島原発第一の怖い現状！”（http://matome.naver.jp/odai/2134107739146367201、2014年8月）という見出しが躍る。安部所長はこうも仰っていた。「福島のある面しか外に届いていない。福島の普通の部分、日常が十分伝えられていない。」と。つまり、強調されている部分があたかも福島全体のように誤解されてしまうのだ。この様な誤解は、提供される支援と実際に必要とされる支援の間に不一致を生み、その不一致が結果的に支援から漏れてしまう地域、人々を作り出してしまうと考えられる。実際、安部所長は必要とされている支援は、今まで（今も？）メインの「金銭的な応援」から「心情的な応援」に変わってきていると仰った。この変化は、次に訪問させて頂いた「NPO法人結」代表井上トヨさんの話にも通じるのだった。

「NPO法人結」は福島市渡利で、資源回収、印刷・版下作成、手工芸・制作販売、手芸等教室、リサイクルショップ“フルフルハウス”を運営している地域活動支援センター/障碍者地域生活センターである。訪れた際にも、スタッフやそこで働くメンバーの方々が忙しそうに販売品の整理や製作準備を行っていた。センター内には着物生地を利用して制作された美しい髪飾りや人形、バッグに携帯ストラップ、オーストラリア人にも好まれそうな甚平が並べられていた。それらの品々に囲まれ、笑顔で対応して下さったのが代表の井上トヨさんである。スタッフの方にてきぱきと指示を出しセンターの仕事を回されていることが一目でわかり、御馳走になった冷たい麦茶に喉が潤わされた。井上さんの話によると、震災直後は様々な組織・企業から販売協力の申し出があったという。しかし、当初から「この支援は2年だな。」と思ったと言い、実際、そのような支援はここに来て殆どなくなったそうだ。井上さんは淡々と、またさばさばとこの話をして下さったが、同時に、やりきれないような、あるいは淋しいような表情をされたようにも見えた。支援する側も変化しているのだろう。「もう福島も落ち着いた。」と思っているのかもしれない。しかし実際は必要とされる支援の形が変わっただけなのだ。今の｢結｣に合った支援があるはずだが、ここでもまた“ありのまま”の姿がうまく伝わらず、｢結｣への支援は終わっていた。

梅雨明けを待つ福島は空一面雲で覆われ、日に何度も雨が降った。幸いにも「福島大学附属特別支援学校」の駐車場に入った時には雨がやみ、傘なしで玄関までたどり着けた。まずは、神野興福校長が迎え入れてくれ、その後、鈴木裕美子校長にお目にかかることができた。鈴木校長によると、特別支援学校では震災直後数人の生徒が県外に避難したそうだが、現在はそれらの生徒たちも戻ってきて、震災前とほぼ同数の児童数を保っているという。鈴木校長の話を受け取り、神野福校長が昨年度の学校活動を詳しく説明して下さった。学校がたまらなく好きで下校したがらない生徒がいること、高等部生徒が自分達で作るカフェの活動に苦労や喜びを感じ大きく成長したこと、泊まりがけの尾瀬体験学習を通し生徒達が自信をつけたこと、そこには特別支援校の“ありのまま”があった。パースでは未だ「福島では放射線量が高くて外遊びができないらしい。」「県外に転校する児童が後を絶たないらしい。」との認識が広まっているので、神野福校長の話はあまりにも「普通」過ぎて驚いたほどだ。勿論、「普通」でいられる陰には教職員・保護者のたゆまぬ努力があるのだが、そこにも外に伝わってこない“ありのまま”が残されていた。

当日、最後に訪れたのはラジオ福島だ。本多純一郎社長と専任局長で人気パーソナリティでもある大和田新さんにお目にかかることができた。大和田さんは、震災直後から避難所や仮設住宅をあちこちまわり、住民の皆さんの生の声を聞き続けている方だ。福島の“ありのまま”の姿を一番よくご存じの一人であろう。また、震災直後から福島に入り支援を継続している太田ゆりさん、そして太田ゆりさんの御父上元駐タイ大使太田博さんとも知り合うことができた。太田ゆりさんは、原発作業員を追ったドキュメンタリー映画をコーディネートしたり、ストリートミュージシャンとして歌を歌ったりしながら福島を応援しているそうだ。こんなメンバーが集まったところで、大和田さんからご自身の番組に出演しませんか、という誘いがなされた。番組内で何を話したのかは緊張のあまりよく覚えていない。しかし、最後に大和田さんが仰った「これからも福島への支援をお願いします。」という言葉ははっきりと記憶に残った。福島の生の声を知り尽くしている大和田さんのこの言葉に、福島への支援・応援はまだまだ必要である、ということを再度確認させられた。

パースで親親メッセージ記入の協力を仰いだところ、「福島を支援・応援したいけど何をやればよいのかわからない。誰にコンタクトをとればよいのかわからない。」と言う声を多くの人から聞いた。パースふくしまの会を含め、そういった多くの人々は、福島の“ありのまま”の姿を知ることで、規模はまちまちでも“個々の状況に合った支援”ができるようになるのではないだろうか。パースふくしまの会にとって、マス・メディアに取り上げられないような福島の日常を広く伝えていくことは大切な役割になるだろう。たいそうなことはできない、しかし、パースふくしまの会では、今後も出来る範囲で出来る限りの支援を続けていきたい。まずは、応援する側も“ありのままで”無理せず心を寄せている気持ちを伝えていこう。

7月中旬の福島市…

* 駅には大きなわらじ。わらじ祭りが近い。
* 前回訪れた時にはなかった駅上のスターバックス。老いも若きも長い列に加わり、冷たい飲み物を次々と求めていく。随分並んだあと、私も、アイスモカを頂いた。
* デパート中合（なかごう）にはセールの大きな垂れ幕が。駅横S-Pal（エスパル）でもサマーセールのまっただ中。若い女性たちが次々とお目当ての洋服を買っていく。いくつか試着したが、中年女性には痛い。購入を断念。
* 集中講義の仕事で訪れた大学。将来について悩む学生は全国共通。がんばって、とエールを送る。
* The K.I.S.S.メンバーが再会を祝って下さった。お酒も手伝ってか、もともとか、笑いが絶えず、腹筋が痛くなりながら帰京の途に就いた。改札で手を振って見送って下さる姿に感謝。福島、応援し続けますね、と心に誓った。